園バス安全装置「早く」

こども家庭庁「暑い時期続く」

静岡３歳放置死１年

幼稚園などの送迎バスで、園児らの置き去りを防ぐ安全装置の設置が遅れている。今年4月に義務化されたものの、バスの稼働中に設置するのが難しいことなどが理由だという。静岡県牧之原市の認定こども園「川崎幼稚園」の通園バスで、河本千奈ちゃん（当時3歳）が熱射病で亡くなった事件から、5日で1年。こども家庭庁は「暑い時期が続く。早めの設置を」と訴えている。（河野越男）

「ピピピピ」。8月30日、神奈川県厚木市の「厚木のぞみ幼稚園」で、運転手が園児を送り終えた送迎バスのエンジンを切ると、車内に安全装置の警報音が鳴り響いた。付き添った職員が車内を見回って園児が残っていないかどうか確認し、後方ドアの上部に設置された黒いボタンを押して音を消した。押さない限り、警報音が鳴り続けるため、職員はバス後方まで移動する。その間に車内をチェックすると期待される。

送迎バスの後部にあるボタンを押して警報音を止める「厚木のぞみ幼稚園」の職員（８月30日、神奈川県厚木市で）

園児210人中119人がバスを利用する同園では夏休みに入った7月下旬、専門業者がバス3台に約6時間ずつかけて設置した。中野嘉子園長(79)は「従来、職員が目視確認するなどして置き去り防止を徹底してきたが、装置を設置し、ご家族に安心してもらえる体制が整った」と語る。

国は牧之原市の事故を受け、全国の施設に安全装置の設置を義務づけ、来年3月までの経過措置を設けた。同庁によると、6月末の時点で「設置済み」か「完了予定」だったのは全国で55・1％。各自治体は、バスが稼働しない夏休み期間での作業を促した。

発表時点で設置率が全国最低の20・3％だった滋賀県は、8月末時点で65・6％まで引き上げた。県は経営の苦しい施設も装置を早期に導入するよう、装置の購入前から費用を補助する仕組みを取り入れた。それでも9月末の段階で8割程度にとどまる見通しだ。

安全装置は現在、国内43社が販売しており、うち1社の「加藤電機」（愛知県半田市）は昨年10月から今年6月に1万3000台を販売した。さらに7、8月には3000台を納品し、今後、約5000台を出荷する計画だ。加藤学社長(57)は自社での販売状況から「国全体で設置を終えたのは8割に達していないのではないか」と類推する。

気象庁によると、9月前半は関東地方より南で30度以上の真夏日が多い見通しで、日によっては35度以上の猛暑日になる可能性もある。こども家庭庁は改めて「早期に設置するよう促してほしい」と、自治体に呼びかけている。

「心よりおわび」

理事長が謝罪

事故の園側

「川崎幼稚園」を運営する学校法人「榛原学園」の増田多朗理事長(43)が4日、取材に応じた。

河本千奈ちゃんが亡くなったことについて、増田理事長は「千奈さんに心よりご冥福をお祈りするとともに、遺族には心よりおわび申し上げる」と改めて謝罪した。また、「ご遺族の悲痛な思いは十分理解している。一方で、入園希望者がいる以上、（園は）継続していく」と述べた。

増田理事長は、事件当日にバスを運転していた父親の増田立義・前理事長(74)（業務上過失致死容疑で書類送検）が辞任したことに伴い、理事長に就いた。